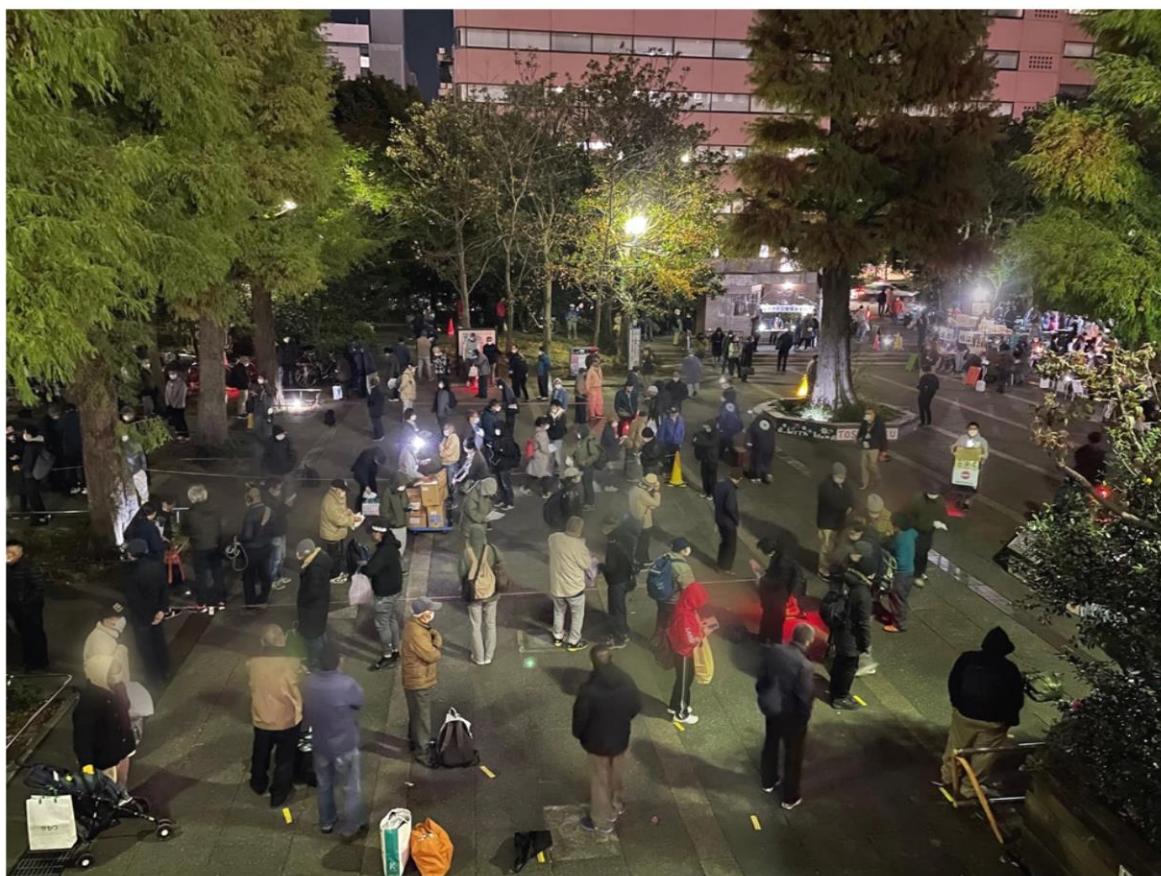


TENOHASI

てのはし／地球と隣のはっぴい空間池袋

会報誌第42号 2021年12月10日発行



歴代最多の472人が並んだ11月27日の炊き出し

P 2 「炊き出し緊急事態宣言」

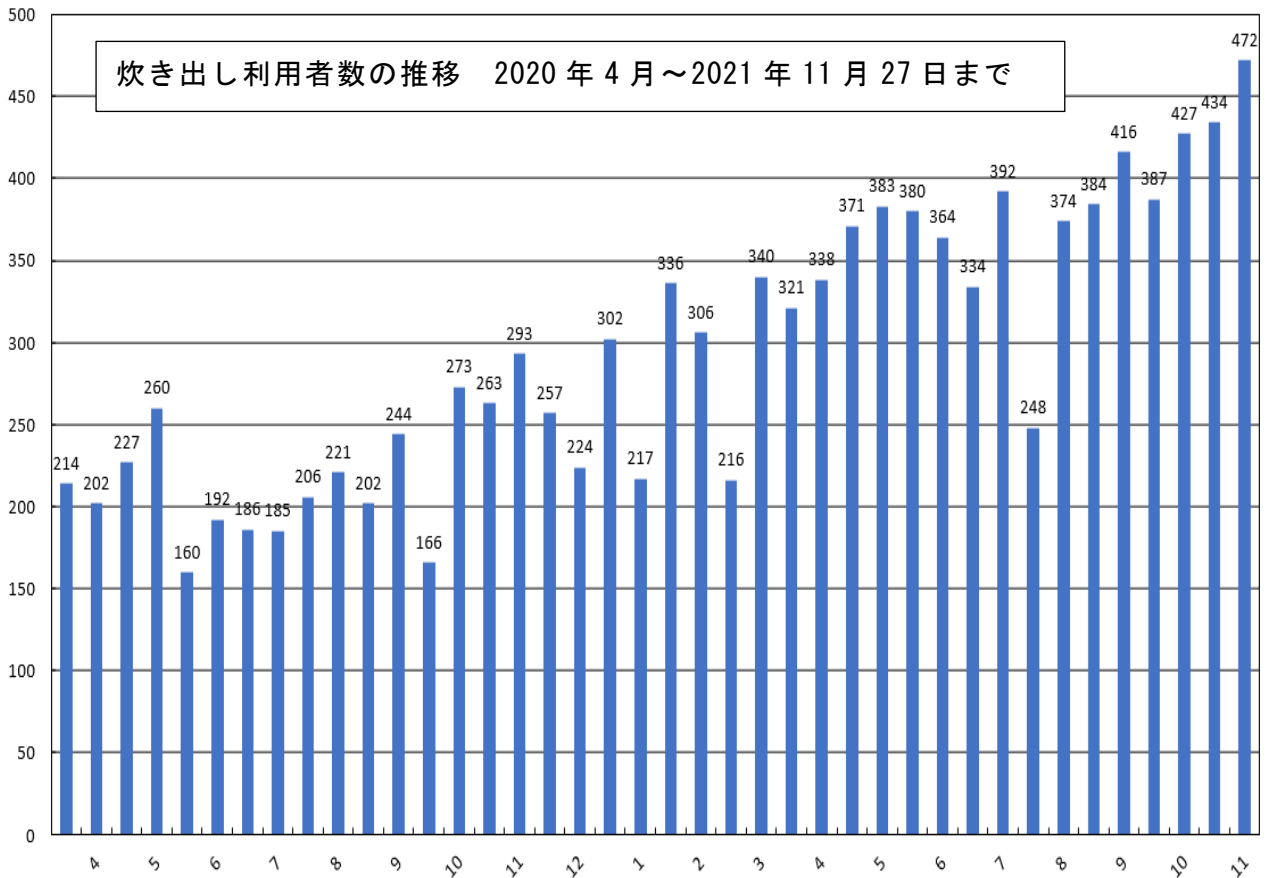
P 4 コロナ禍で炊き出しに並んだ若者がボランティアをする理由

P 9 TENOHASI 活動報告 2020 年度

P20 TENOHASI 生活相談員・ボランティアから

P25 ご寄付ありがとうございました

「炊き出し緊急事態宣言」 収束見えないコロナ禍



くれえいながたばたれこい性が珍しくなるとい

り人前、1、3、昔は珍しかった。20代

のた並前人で、増え、毎見ると、その特徴は

をの記はそ、録して、炊き出し、七、高、人、数

いて小な4の困ト、うト室り0公層ツ十、珍レさ、園がプ月、現ン、食、液に十、象ド眞弁、は二状掲八、ま上子当は十化載日、で位さ4ネ分のさ、起にん0ッでよれ朝、き食を0ト消うた日、まい押食でえに記新、たむのが題弁都、とけ、に、当、心、貧、面

り半一ち急かの緊には、前以貫着事のグ急並終新、に降しき態よラ事ばわ型、なはてま、言にををるま口、つ4右し、の、見迎方しナ、い0上があ、昨てえのたの、ま人が、と年いて数は、急、す突り八いのたいは、急、破、月、第、だ、ま、さ、炊、事、が九、以、た、一、い、す、ら、き、態、出、宣、当、月、降、ん、次、て、な、出、宣、た、後、は、落、緊、わ、上、る、し、言

コロナ禍で炊き出しに並んだ若者がボランティアをする理由

九月の炊き出しで初めてボランティアに参加した青年が「実は、生活に困って、この炊き出しに並んだことがありました」という自己紹介をしてくれて、びっくり。28歳、長身の好青年に何があったの？インタビュースエでもらいました。

・出身はどこですか？

三重県の四日市市です。

・サッカーで有名な四日市中央高校とか、石油化学コンビナートとかあるところですね。子供のころはどんな感じだったんですか？

実は不登校でした。



服部宇起(たかおき)さん

小学校に入学して半年くら

いたところからです。学校でちょっとしたいじめがあり、自分が犯人にされました。ぬれぎぬだったんですが、先生に叩かれて不信感をもったんです。それまではすごくまじめで、「学校でちゃんとやったら大人になったときにちゃんとい人になれる」と信じていたのに、裏切られた思いが強くて。今なら「先生だって間違える」と思えるけどその頃は思っていなかった。信じていた世界ががらがらと崩れた。こんなところで教わって何になるんだろう？って。それから学校に行ったりいかなかったり。

・そうですね。そうなる勉強や友人関係はどうでしたか？

当たり前ですが勉強についていくのは厳しかったです。算数とかで「前やった次がこれ」と言われても前やったのが何だかわからない。

友達も、グループができていて、どこにいたらいのかわからない。盛り上がっている話題には入れない。浦島太郎状態。僕は脚に障害があってスポーツも難しい。

でも、一緒に帰ってゲームで遊ぶ友達はいました。ゲームは大事なツールです。

登校した日数は担任の先生によって変わりました。合う先生なら半分くらい。合わない2〜3割。2年の先生はいい人だった。家まで来てゲームを一緒にやってくれたり、席はクラスをまとめる生徒の近くにくれたり。5年の先生にはいつも席を教室の角にされました。のけ者にしたいんだなと感じました。見えない存在として。

・親御さんはなんと？

親からは最初だけ「行け」といわれましたが、半年か1年もめた末に、親が折れませんでした。この子は学校に行かないんだなど。それからはずるさいことは言わなくなりました。ずっとゲームしてたら手伝えと言われるくらい。他には水泳とピアノ・和太鼓を月1くらい行くようにしてくれたり。

・で、中学校では？

ほとんど一緒です。中三になつたら受験があるので、そのときは一カ月も勉強したかな。親が参考書とか買ってきたのでそれで勉強しました。下から三番目くらいの高校に合格したんですが、半年でやめました。もともと行きたくなかったんです。自分の中で「学校に行くのは嫌だけど、高校ぐらいは卒業しないとダメ

メだな」と感じて、我慢しようと思っていました。周りにはヤンキーばかり。授業中なのに音楽聴いて雑談していたり。ここで3年耐えるのは無理だと思いました。

・それから？

半年引きこもりました。これから生きてても何かあるのかな？家にいてモバゲータウンやったり、知らない人とネットでやりとり。同じく引きこもっている人がいたのでグリーとかで毎日雑談してました。

でも、そこで恩師に出会いました

カンボジアの支援をしているNPOが小豆島で自給自足の村をしていきました。公民館のセミナーにその代表がきて、親に「暇なんだから行けよ」と言われて行ったんです。そしたらその代表に「自給自

足の村に来いよ」と言われました。家にいても何もなかったから、行ってみました。

海の近くにみんなで行って、畑をして、年代も職業も違う人が5人くらい、土日は10人集まるんです。そこで人と関わる機会ができました。おもしろかった。

その次に、北海道で引きこもり不登校の人が農業をする団体の人と知り合って行ってみました。安平町という田舎町で、トウモロコシやジャガイモを作りました。そこは二段ベッドの四人部屋で、鬱病の人とか、いろいろな事情の人がいて。ケンカしまくりでしたけど、同じことをチームでやるのはやりがいがあったし、関わり方の勉強になりました。

それまで、どうせ自分はないやってもだめだと思っていた。虚無感。これからなにを

してもいいことはないだろうな。だから他人にも関心がありませんでした。どうせこの人と関わっても何もないんだろっ、どうでもいいと。人が話しかけても無難に流してすぐ立ち去るとい感じ。だから深いつながりの人はできなかった。

北海道でも、最初は人と関わるのがイヤでした。でもそれから仲良くなって、深いつながりの人ができました。初めてでした。ちょっと前向きになれました。もうちょっとちゃんと社会に出ようと思った

冬になって三重に戻りました。それからマックとかでアルバイトしながら海外支援のNPOでボランティアしました。スラムの子をイベントに呼んで、イベント会場を設営したり滞在の手配をしましたし、現地にも遊びにいきました。そのNPOには可愛がってもらいました。

そうしているうちに「若いうちに世界を見たい」と思っ
て月250時間働いてお金を貯め、21歳で世界一周しました。全部で10か月行きました。全部で10か月に南米で4ヶ月くらい。生活や文化を知りたいと思って現地のガイドに払ってスラムを回りました。マチュピチュもウユニ塩湖も行きましたよ。

段階を踏んで少しずつ人と関われるようになったと思います。

22歳で帰国。夢を達成した後、やりたいことがなかった。ので、とりあえず東京に行ってみようと思いい上りました。

東京では飲食でバイトしながら、NPOと呼ばれて、学校の人権学習で不登校や障害の当事者として話したりしたこともあります。

26歳の時、あるハンバーガーショップでバイトしていたらフランチャイズの社長に誘われて正社員になりました。

やがて店長として店舗を任されて経理・人事・総務を全部やらせてもらいました。大変だったけど、すごくやりがいがありました。年上のバイトとどう関わっていたのか、上司とどう関わっていたのか、いか、とか。みんないい人でした。

ところがそこにコロナ禍です。去年3月から。売り上げが下がると人員削減でバイトを減らされて前は3人でやっていたことを2人、さらに暇な時間はワンオペ（1人営業）に。それまで脚に障害があるので重いものは運んでもらってたんですが、上司から「業績がまずいのでこれ以上障害の配慮はできませんよ」。

でも、ワンオペだとレジ・キッチン・席まで運ぶを全部

やらないといけない。移動距離がすごいんです。腰を痛め、7月で退職しました。年末まで半年リハビリ。失業保険が出たのですぐに路頭に迷うことはなかったんですが、不安ばかりでした。飲食しかしてないから手に職などないし。ちなみに、店長は手取り月22〜3万くらい。失業保険は月15万くらいでした。これがあるうちに仕事を探さないと。でもいつから復帰できるのかな。と。

今年の年明けはどん底でした。コロナでやばかったので1〜2月は就活せず、ITに進もうと思ってプログラミングにトライしましたが挫折。

「どうせ何にもない1日が始まる」って無気力状態。人に会うこともできない。不登校時代にちょっと戻りました。

さすがにヤバいと思って3月はどうやって転職できるの

かなと調べだして、転職エージェントに登録しました。主に障害者雇用のエージェントです。4月後半から応募ボタンを押して就活開始しました。業種など全く絞らず片端から応募しましたが書類選考に通るのが2〜3割。つぎに面接ですが、慣れてなかったのてんぱりまくって、エージェントにしつこいくらい聞きました。エージェントも採用されない和金が入らないから必死です。「こういう質問が多いので回答を考えておいてね」といわれて面接対策するんです。ありがたかった。でも、本番になるとすごく焦る。1つ面接受けるだけで店長1日やったくらいの疲労です。

炊き出しに並んだのはその頃、5〜6月です。「失業保険は5月末で切れる、貯金も乏しいのに、いつになったら仕事が決まるかわからない」と言うときでした。「東京ごはん タダ」で検索して、新宿・杉並・池袋などいろんな炊き出しにしてみました。

路上生活されている人から見たら僕なんかまだ恵まれているから貰っていいのかとは思ったんですが、とにかく貯金がいつまで持つだろうかと不安で、すりがたい状況だったんです。

・それまで炊き出しにいくなんて考えたこともなかったでしょう。感想は？

ほんとうにただ一言「ありがたいな」。

初めてのはしの炊き出しにいったときは「路上支援なのに僕みたいな人が貰っていいのか」と思って、最後尾の看板を持ってたスタッフの人に「もらっていいんですか」って聞いたら「いいですよ。脚が悪いなら別のところで座っていいですよ」って言うてもらいました。

不眠が強かったんで医療相談も行きました。精神科のお

医者さんに寝る前にちょっとリラックスする方法や、寝る前に酒はダメとか（笑）アドバイス頂きました。

生活相談も。女性の相談員さんがやさしかった。仕事探しの相談でしたが、それだけじゃなくて障害年金を申請できるんじゃないですかとかアドバイスもらいました。

なによりもこんなに並ぶ人がいるんだと言つのが衝撃でした。大変な人が多いと思っていたけど 予想を遙かに上回る列。

並ぶ人の多様性にもびっくり。年配男性が多いと思ったり同年代も多いんだなど。女性も、シングルマザーかなと思っ子連れの人も。

「自分がこんな所に並ぶようになってしまった」とかは思わなかったです。それよりも、「なんとしてもここから抜けだそう、今は支援をもらうけど早いうちに脱したい」という思いが強かった。

全部で80社に応募して、面接までいけたのは20ちょいです。

最初は辛かった。準備してのに自分を否定された、って。ものすごく行きたい企業もあったんです。

でもある程度したら慣れてきました。半分以上は落とされるんです。

内定もらったのは6社でした。でも、ある生命保険大手では求人票には「昇給あり」とあるのに「知ってると思います昇給ないです」とかいわれて、こちらから断りました。ある住宅大手では人事と現場の人のいっけることが全然違う。事務所で「お前何やってんだ」的に怒鳴っている人がいて、内定もらっても「こはないな」と。

申し込みから内定まで一ヶ月半くらいかかるから、次こそは決めたいと思って毎日面接の日々。だいたい面接は最

初オンラインで、最後だけ対面です。

最後に、ゲーム大手で内定しました。ゲームは好きだし、仕事は人事で、ハンバーガーショップ店長の時に人事が好きだった。在宅勤務や時差出勤・休日もおおくて障害配慮の面で不安がなかったのも大きな理由でした。

11月から働くことになったので9月にてのはしのボランティアに初参加しました。

・どうしてボランティアに？
活動の重要性をすごく感じました。物質的・精神的にも助けてくれる人がいるというのは励みになりました。困ったときに助けがあるのはとても大事です。恩返しをしたい。まだお金は出せないけど、今困っている人が多少でも助けになる活動が続いてほしいという気持ちがあります。

いつかまた自分が並ぶかもしれないし、友達が並ぶこともこともある。そういう人たちのセーフティネットはとも大事。これを月2回も開催しているのはすごいです。

ずっと思ってたのは、仕事を首になってから生活保護になるまでの中間的な支援がないんだな、と言うことです。緊急小口などの貸し付けはあるけれど、いつか返さないといけないから貯金があるうちは考えなかったんです。なんとか貯金を崩すのを防ごうとして炊き出しに並んでいました。菅首相が「最後は生活保護がある」って言ってたけど、制度的にはその間の支援はないから、一番下に落ちる前の支援は助けられました。

・ありがとうございます。では、これからどんなことをしたいですか？

まず仕事をちゃんとがんばって 信頼されるようになりたいです。人事の仕事をしていて、今はアシスタント業務だが、後々は採用担当なども任せてもらえるように頑張りたい。

てのはしのボランティアは、まだ仕事に慣れなくて疲れている日もあるけど続けたいです。いずれ収入的に落ち着いたら、寄付もしたいです。

インタビューを終えて

最初は「こんな好青年がコロナ禍でどのように困窮したのか」がメインのインタビューでしたが、聞いていくうちに「自分は不登校。学歴もない。この先自分には何も無い」と虚無に襲われていた少年がどのように人とのつながりを取り戻して前に進むことができるようになったか聞くことができました。若者支援の大切さを知りました。また、話には少ししか出ませんでした

が、彼を否定することなく受け入れてきた親御さんの懐の深さも重要だったと思います。

こんな人たちがてのはしを支援しています。
清野賢司

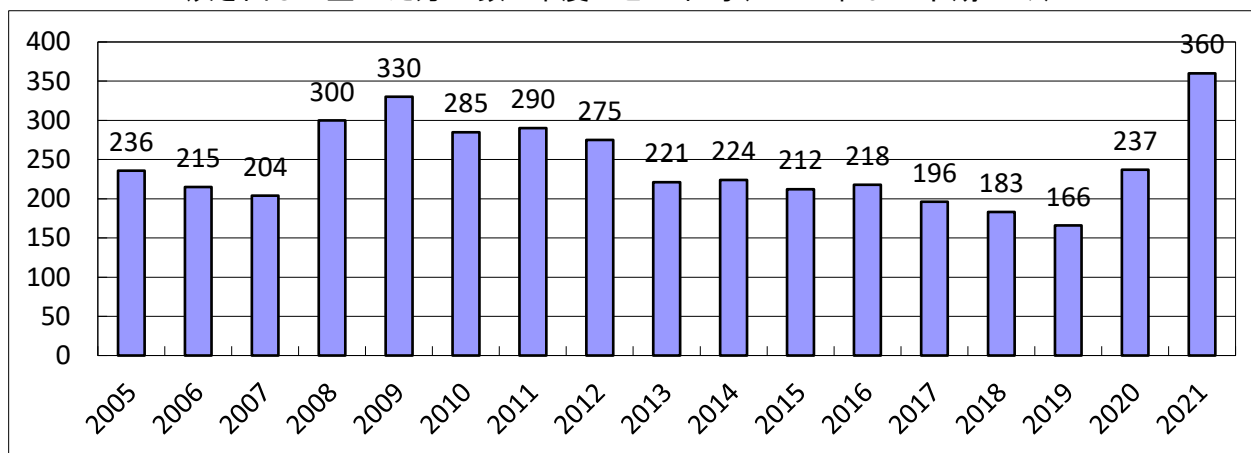




TENOHASI 活動報告

2020年度

炊き出しに並んだ方の数 年度ごとの平均(2021年は上半期のみ)



炊き出し

2020年度、炊き出しに並べられた方は平均237人。前年の166人と比べると約60人増えました。さらに、2021年は上半期だけの集計ですが360人。ほぼ倍増です。

グラフを見て頂ければわかりますが、てのはしの炊き出しに並べられる人はずっと200人前後で推移してきました。リーマンショックの2009年に330人というピークを迎えましたが、その後はゆっくりと減少してきて、もうリーマンの時のようなことは起きないんだらうなと思っていました。

そこにコロナ禍です。巻頭でも書きましたが、最初は徐々に並ぶ人が増えて「波が来た」と感じました。そして年が明けてからその波がさらに高くなり、いまは津波です。

ただ、池袋の路上生活の方の数は増えていません。最近、夜回りで合う方は40人程度で、6年前の91人と比べると半分以下です。オリンピックを当て込んで野宿できる場所がつぎつぎに改修されたこと、長期の路上生活者が私たちのシエルターを使って次第に路上を脱出していること、新たに困窮した人は駅や公園で寝るという生活が最初から選択肢にない人がおおいということがその理由と考えられます。

炊き出しの調理場は密になることが避けられませんが、去年3月以来調理は中止して、ずっとお弁当を個人経営のお弁当屋さんに作ってもらって配布しています。お弁当屋さんかほぼボランティアで安く提供してくださっています。それでも最近は1回の弁当代が20万円を超えています。ご支援をよろしく願います。

コロナ禍での炊き出し活動報告

ご存じのとおり、てのはしでは 2020年2月の第4週まで通常の炊き出しを実施してまいりました。私は2019年1月からドライバーとして参加して

まいりましたが、コロナ対策体制をとる現在は、LINEグループでのスタッフ配置・各班の調整および取りまとめ、関係団体との連絡、終了後の Facebookでの情報発信等のお手伝いをさせていただいています。

2020年3月14日から始まったコロナ対策としての公園でのお弁当配布は2021年1月27日で45回目を数え、並ばれた方は450食用意し、たお弁当を上回る472名で、2009年のリーマンショック時の最高記録を更新しました(ちょうど1年前の2020年11月28日は293食でした。ページのグラフをご覧ください)

なんと今や、公園内では人が収まらず、歩道まで並んでいただいてる状況となつています。

並ぶ方も一見綺麗な身なりの方や、以前では考えられなかった若い女性、中にはお子さんを連れた方もいらつしやいます。

東京オリンピック終了とともにデルタ株の感染が増加し、スタッフと並ぶ方の安全のため9月には配食と衣類配布を同日に実施することを断念、衣類配布をすべきかどうかスタッフで議論し炊き出しとは別日に実施する等、様々な対策を重ねてきました。

そして緊急事態宣言4回目のさなかの第5波の後、感染者数が急減し少し気を緩めたところで「オミクロン株」の発生。

今後も気が抜けない状況です。



今のLINEグループスタッフはほとんどが昔の「ぶっかけ飯」を知らない人の集まりとなっています。

ぶっかけを作っていた頃、調理の際のベテランのおばさんのおしゃべりや、まかないをとりながらの交流、公園での当事者同士の団欒(コーヒーサービスや「ほっとも」も継続して中止。そして何よりも、ほかほかのご飯にかける、野菜をたっぷり使ったぶっかけ汁。これらが、遠い昔のように思えます。

しかし、第2、第4土曜日に東池袋中央公園に行けば、衣服と食事と生活相談、医療相談、そして清野さんがいる。それは変わっていません。コロナ禍も悪いことばかりではなく、てのはしも新しい時代の風を取り込みました。以下はこれまでに重ねた工夫です。

LINEグループ(約110人)により情報を共有・マニュアル化し、毎回事前に配置を決め各班が動く事により配布を極めてスムーズに実施

オンラインによるメンバー間の会議(総会もオンラインで実施)

スタッフ間の仕事・配置の見える化や、名札の導入による顔と名前の見える化

・パルシステムとの協力体制によるパン、バナナ、トマト等の配布(400人分の提供)

・他団体(新宿ごほんプラス)との情報交換・配布手法の取入れ

・雑踏警備の経験スタッフによる整理誘導手法・資材の取入れ

(トランシーバー10台を使用し各班で連携を取っています)



・並ぶ方の利便性の向上のため以下を実施

①約50分かかっていた配食を、配るものはあらかじめ全てを袋詰めし準備、配布は2列

にすることにより、約30分に短縮

②医療相談、生活相談、針きゆうで相談中でもスタッフが弁当を確保、バックヤードでの弁当数の把握

③歩行困難な人が並ばなくてもいいように、トイレ前に専用コーナーを設置

④衣類配布(現時点180名が並んでいます)の時短のため配布テーブルを2列にし種類別に先頭でヒアリングした上で案内

(以前は周回していましたが、人数が多すぎてここから複数点を一度に配布)

⑤アメニティコーナーを充実させ、靴下、タオル、石鹸等を全員に配布

⑥女性の増加に伴い衣類配布に女性物専用コーナーを設置

⑦緊急用衣料セットを常備し、生活相談等で真に衣類を必要としている方に対応

⑧SNSを活用した情報発信とAmazon欲しいものリストの作成により、リアルタイムで寝袋や下着等の必要



なものを募集

中止していた初参加者募集もホームページからの応募で人数を絞った上で行い、継続していただける方にはLINEグループに入らせていただいています。

1度に450食のお弁当を用意することには、20万円を超えるコストがかかっています。

お弁当をもつと質素なものにするのも出来るでしょう。しかしコロナ禍で職を失い「3日ぶりの食事です」等の声を聞くと、大盛りのおいしいお弁当を出してあげたい、と清野さんは言います。

これらの活動が出来るのは会員の皆様のご寄付のおかげです。皆様からのご支援により、今後もてのしは炊き出しを継続していきます。

コロナ禍が完全に収束し、1人のドライバーとして参加できる日まで、この体制をお手伝いしたいと思っています。

(大塚教徳)

医療相談

●実施回数

通常24回十越年越冬期間3回(2020年4月～2021年3月)

●のべ受診者数

1158人 紹介状発行数21通

●ボランティア参加人数

医師18人、看護師11人、運営・運搬サポート21人

(※毎回、医師、看護師、サポート合わせて大体15人くらいのボランティアが参加)

●医薬品の寄付

風邪薬、湿布類、トローチなど

●医薬品購入経費

約56万円(8月第2土曜日に配布の虫よけスプレー約12万円を含む)

●新型コロナウイルス感染予防キット配布数

5767セット

予防キット用のマスクや消毒液、石鹸など沢山のご寄付を頂きました。

包装材料や小分け容器、マスク、アルコール消毒液など購入費用

約200万円

2020年度の活動はコロナ禍に始まり、コロナ禍に終わりました。年間通して前年度にも増して、沢山のボランティアさんが活動に参加してください、コロナ禍にありながら1度も休むことなく無事に医療相談会を実施することができました。2020年度の新しい試みとして、精神科の先生による「こころと体のよろず相談ブース」を設けたこと、また6月から歯科の先生がボランティアに来て下さるようになり、歯科相談を毎月1回開催できました。またコロナ禍での活動でしたので、

感染防止に十分に気を付けて、雨が降った時以外はテントを立てず、各ブースの機の距離を2m以上離して配置、また発熱、咳、だるさなど訴える方を診察するために「発熱ブース」も設置して、1年を通して寒い日も暑い日も青空診療となりました。特に並んでいる方への聞き取りや検温に力を入れて、体調不良の方を素早く診察できるようにしました。1回の受診者数はお天気に左右されましたが、およそ30～50人で、毎回顔を見せに来てくださる方も多くおられました。一番多かった回は、55の方が受診された11月14日でした。幸い1年を通して新型コロナウイルスの感染を強く疑うような症状の方はいませんでした。風邪やアレルギーによる鼻水や咳、胃腸の不調や、腰、膝の痛みを和らげるための湿布を求める方が変わらなりました。また乾燥や虫さされ、蒸れによる皮膚のかゆみを訴える方も非常に多く、プラ

スチック容器に小分けした軟膏類を全体で600個以上お渡ししました。ご自身で爪を切ることができず足に痛みが出ていた方もおられ、公園が暗くなった後も、ボランティア看護師が時間をかけてケアする場面も見られました。

こころと体のよろず相談では、精神科医と看護師らが複数名で、患者さんお一人ずつのお話をゆっくり伺う機会が多くありました。そのため、1回の炊き出し相談会で、沢山の方を診ることはできませんでしたが、一度じっくりお話を伺うことで、その方が実はどんなことに一番困っているのかをご自身で認識したり、ご自身のご希望がはっきりしたり、そこから生活相談に繋がります。必要な支援にたどり着けた方もいらっしゃいました。医療相談会では多くの方が、繰り返し毎回訪れてくださいます。そこには利用者さんとボランティアとの間に信頼関係

があり、ただ会いに来くるだけでもいいんだな、何か困ったらここに相談してもいいんだな、そう思って頂けている「場所」でもあります。そういえばある時こんな面白いことがありました。毎回歯科相談に訪れる方が、「今日は歯科医の先生おるんかな？ぜひお礼を言いたいと思って」治療に繋がって痛みが取れたのかな？とか、この間頂いた歯間ブラシや歯ブラシのお礼かな？と思っていたら：「先生に教えてもらった、バトミントン用品の店のセール行ってきたよ！いい物が手に入ったからそのお礼を言いたかったんやー」そうか歯科相談ではそんな相談もできるのかあと、目から鱗でした(笑)。この様なコミュニケーションが生まれている医療相談です。

り合わせの1年でした。その様な中、医療班では新型コロナウイルス感染症予防キットの配布を続け、2020年度は約5,800セットをお配りしました。感染予防や相談先を記したチラシ、マスク、手作りマスク、アルコール消毒液、液体石けんやティッシュ、カイロなどをセットにし、炊き出しや夜回りに並べられた方、お一人お一人にお声がけしながら手渡しました。その際に、体調を伺ったり、その日の相談会のご案内をしたり、また行政が提供しているビジネスホテルの入居案内など、その都度最新の情報をお伝えするために積極的にお声がけしました。

(世界の医療団 武石晶子)

ほっと友の会(お茶会)



しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の状況から、現在は開催しておらず、休会しています。そのため、昨年度の活動はありませんでした。

★今年度の方針

今年度も、昨今の感染状況から休会を続けます。

少しでも早く状況が落ち着き、みなさんとお茶を飲み、語り合える時間がくることを願っています。

★おわりに

現在、公園で活動されている皆様、ほっと友への問い合わせに答えてくださっている皆様、いつも本当にありがとうございます。

この厳しい状況を、一人でも多くの方が無事に過ごせることを願い、それぞれの場でできることをしていきたいと思っております。(稲見得則)

★活動

毎月第4土曜の炊き出しの日に、みなまでお話をする活動です。いつもであれば、公園内にダンボールを敷いて輪になって座り、コーヒーや手作りのお菓子を食べ、歌を歌い、そして場が暖まった後、落ち着いた雰囲気の中で話し合います。

生活相談

炊き出し・夜回りで路上脱出を望む方の相談を受けて、生活保護や自立支援・仕事などにつながる活動です。もちろん無料。その方の希望や経歴・強みを聞き取って、その方の望む生活につながるためにワンストップの支援をこころがけています。

①年間の相談者数

・2020年度の新規相談者（電話やメールだけの相談は除く）は合計294人でした。前年の132人から倍増です。1人で2〜4回相談の人もいるので延べの相談数はもっと増えます。

②相談の入り口

・炊き出し 175人。1回約6人の新規相談者です。
・夜回り 71人。
・電話またはメールから 54人。前年の14人から大幅に増

えました。ネットを駆使できる若い方が最後の最後に検索してたどり着いたというケースがふえていることがあります。

*この人数はすべて直接会って相談に乗った人数で、メールや電話だけの相談もあります。

②月ごとの相談者数

平均約24人。最高はやはり第一次緊急事態宣言でネットカフェが休業した四月五月、そしてさらにコロナ禍が広がった二月でそれぞれ35人でした。少なかつたのはコロナが小康状態だった八月の16人で、コロナ禍と相談者数は密接に関連しています。

③年齢

平均年齢はちょうど48歳。前年度より2歳下がりました。最年少は17歳の家出少女、最高齢は79歳の路上生活者まででした。コロナ禍が深刻化して若い世代の相談者が更に増えています。

⑤性別 女性が38人で約13%を占めました。前年が10人約8%から増加しています。

②支援内容

・生活保護申請同行 79人
スタッフが同行して申請のお手伝いをします。また申請が受理されても紹介される宿泊先が相部屋の集団施設であるのが辛くて失踪する人が相次いでいるのですが、今年はコロナ禍ですぐにアパートでの生活が可能と判断された方は1ヶ月限定でビジネスホテルに滞在することも認められたので、ホテル利用の交渉をすることもありました

・自立支援センター申請同行 14人

就労を希望する人が6ヶ月間無料で寝泊まりして就労・貯金してアパートを借りようという公立の寮です。一人でも申請できるのですが、「役所に相談するのは不安」という方には朝待ち合

わせて同行します。

・就労先の紹介 11人

すぐにも仕事を始めたいという方に、就職先を紹介し、その場で面接を予約しますただ、私たちの所に相談に来る時点で体もメンタルもボロボロ、すぐに仕事は無理という方が多いので、それほど多くはありません。

・他の支援 102人

仕事が始まるまでの宿泊費を支援・弁護士を紹介・アパート探しの不動産屋を紹介など。

・相談のみ 89人

生活保護について質問を受けたり、医療や支援の情報提供やアドバイスなどをしました。誰かと話がしたくて毎回来る人や、「元気にやっています」と報告に来てくれる人もたくさん（相談者にはカウントしません）。

（清野賢司）

ハウジングファースト東京プロジェクト

障害を抱えながら路上生活をされている方への支援方法開発を目的として始まった「ハウジングファースト東京プロジェクト」は今年で12年目となりました。参加団体は3団体から6団体に増えて多団体多職種連携の支援活動を行っています。

① シェルターの運営

生活保護を受けても福祉が紹介する大人数の施設では心安まらなくて失踪してしまう方に提供する「路上から直に入る普通のアパート型シェルター」。基本四ヶ月の短期契約で、その間に生活保護を受けて一人暮らしの準備をし、自分のアパートに入居することを目指します。

2020年度はコロナ禍で家を失った相談者が殺到しました。またシェルター探しをしてくれる不動産業の方が現れ

たので、契約者のつくりやすい東京ファンドと協力して年度当初の6室から大幅に室数を増やし、2021年3月末現在で豊島区と練馬区で18室を運営しています。(ほかにシェルターではない二年契約の住宅が3室)

シェルター利用者は2020年度の合計で42人。長期の路上生活や、生活保護で紹介された施設から失踪した経験をお持ちの方が大部分で、障害のある方も多かったです。

利用者のうち21人が自分のアパートに入居されました。昨年は8人、一昨年は7人だったのがかなり増えました。そのおひとり。ながく路上生活をしてきた女性が、シェルターを経由してアパートに入居して就労支援事業所にもつながりました。

また、路上生活状態だったカップルもシェルターを経由

してアパートに。めでたく結婚され、仕事も見つかりました。以前、シェルターからアパートに入られたけれど、不安感が高じて失踪された男性は、放浪生活から戻られ、二度目のシェルター利用へ。そこからさらにご本人の希望に沿って、北関東の農場(就労支援事業所)に行かれました。

三月末現在利用中の方が16人。

シェルターを退去された方は3人。

おひとりは「シェルターで体調が回復したから」と静かに路上に戻られました。この方だけその後の行方が分かりません。

後のお二人はその後もおひたりは続いていています。おひとりは二回目のシェルター利用から、先日、ご自分のアパートに入られました。このように失踪、退去してもまたつながる方が大部分です。

路上から直接入れるアパート型のシェルターは都内では

私たちだけでしたが、昨年度は反貧困ネットワークや自立生活サポートセンターもやいもシェルターを開設しました。ハウジングファーストの風が吹いてきていると思います。

② ハウジングファースト東京プロジェクト

路上生活で心身の病を抱えた方が気軽に相談できて訪問看護も受けられるのが「ゆるりんクリニク」、精神障害のある方が地域で暮らすことをグループホームと自助グループで支える「べてぶくろ(しずく)」、シェルター物件を管理運営する「つくり東京ファンド」、アパート探しや修繕を手伝ってくれるHabitat for Humanity、コーディネートを担当する「世界の医療団」が現在のハウジングファースト東京プロジェクト参加団体です。

(清野賢司)

鍼灸班

★活動内容

毎月第2・4土曜の炊き出しの日に、公園内にテントを張りベッドを設置して、鍼とお灸を使った鍼灸治療を、定期的な収入の無い希望者に無料で提供しています。

★当日の動き

15時 東池袋四丁目はりきゅう院に集合、テント・ベッド・毛布・受付用のテーブル・カルテなどの器材をリヤカーに積んで出発、公園にて設営

16時 受付、先着順に治療開始

18時〜19時

治療終了、片付け開始、撤収、はりきゅう院に戻って片付け

19時半 活動終了

★参加者

①鍼灸師…各回の参加者は1〜3人です。
②受付係…1, 2人でカルテや順番の管理、問診を行います。

③準備・片付け・運搬…鍼灸師と受付係の他、公園のおじさんがいつも協力してくださいます。



人手不足の時はTENOHASIに手伝っていただくこともあります。

★利用される患者さん

生保や年金受給、ネットカフェ、路上の方々と様々でしたが、コロナ禍の関係で鍼灸師の人手が不足しており、現在は主に定期的な収入の無い方々を対象としています。
年齢は40〜70代の男性が多いですが、最近では20〜3

0代の若者や女性の利用も増えてきています。

症状では、首・肩・背・腰・下肢・坐骨神経痛など身体各部の痛みや痺れの訴えが多く、その他に頭痛、むくみ、倦怠感、不安感など多岐にわたっています。鍼灸治療は≒でも様々な症状や疾患に有効性があるとされているように、月に2回という限られた頻度ではあります。東洋医学として様々な症状に対応しています。

★この1年での変化とこれから

以前はくじ引きにより患者さんの順番を決めていましたが、現在は受付が密にならないよう、先着順で対応しています。利用される患者さんは10人前後で、ひとり当たりの治療時間は30〜50分程度ですが、枠が埋まってしまつて何人かお断りすることもあります。春からは鍼灸の他、マッサージ師の方にも来ていただき、マッサージを希望される患者さんや、鍼灸の枠がいっぱいでお断りした患者さんにも施術をしています。
新型コロナウイルスとしては、引き続きマスク着用・体温測定・

コロナ用問診・ヒビスコール消毒などを行っています。また、住むところが無く、かつ定期的な収入の無い患者さんには食料や日用品を鍼灸班独自で配布しています。これらの対策に必要な費用や材料はすべて鍼灸班および東京路上鍼灸チーム関係者の寄付により賄っています。参加メンバーの中には介護医療従事者などの理由で活動への参加を自粛している者もいますが、春から新しい鍼灸師も増え、工夫模索しながら活動しているところですよ。

これまで同様、準備片付けにTENOHASIからのお手伝いをお願いしたり、雨に濡れたテントをトラックに積載してもらつたり、また新型コロナウイルス感染が疑われる症状などの患者さんの医療班への依頼、新しく路上に出たなど生活困窮者の生活福祉相談への依頼といった各班との連携を、引き続き大切にして活動してまいります。

(内島真由美)

夜回り

はじめに、毎週水曜日21時半より実施している“おにぎり配り”と“夜回り”において並べられたお会いした方の人数ですが、2020年度と2021年度上半期までの一晩の平均人数は81.5人でした。生活相談は2、3件。ボランティアさんの参加は凡そ20人前後でした。2018年度は平均101人、2019年度は平均82人で、炊き出しとは異なり増加傾向にあるというわけではありません。

緊急事態宣言中に東京都が住まいのない方に提供している、緊急一時宿泊所(ビジネスホテル)の利用も広まり、夜間寝床として利用される人が多かった公園には人がまばらになりました。この緊急一時宿泊所は食事が出ませんので、そこから炊き出しを回って食糧を得たり、日雇いの仕事に行かれていますと利用されているみなさんから聞きまし

た。そのため、緊急一時宿泊所提供期間は街中でお会いするよりも駅前公園に並ばれる方が増加傾向にありました。

ここ最近ではさまざまなご支援があり、夜回りでの食糧提

供も充実しています。

毎週パンの提供をしてくだ

さっている茜の里様、月1でお弁当を提供してくださっている赤羽のフィリピン料理屋 *Neen's Kitchen* 様、あさや *けべーカリー*、個人様手作り



のパンの耳ラスク、その他臨時でお弁当を提供してくださった時穩様やロジャーズキッチン様等からのご支援もありました。マスクのご寄付もお陰様で沢山あり、世界の医療団が作成した感染予防のチラシに石鹼やアルコールをセツトにしたキットも配布し、感染予防へのご協力を促しています。



また、自由学園の中高生のみんなが2ヶ月に一度学校の調理室でおにぎりを握り、夜回りの活動にも参加してくれています。緊急事態宣言中の夜回りには泣く泣く参加できないこともあり、「宣言が出て、助けを必要としている人々がいる。おにぎりを作ることでだけでも、僕たちに出来ることを続けたい」と、みんなの活動の様子が朝日新聞等にも取り上げられました。

冬場には、ご寄付していただいた寝袋やアルミシート等の防寒グッズを多くの方に配

布することができました。駅前公園に来る方の中には、「寝袋が貰えるって聞いて、上野や新宿から歩いて来ました」という方もおられました。

その他、駅前公園での生活相談、巡回中にお声をかけさせていただいた際に相談をお受けし、翌日以降生活保護や自立支援センター、緊急一時宿泊所への申請同行、住み込みの仕事のご紹介、当団体のシェルター（ハウジングファースト型個室アパート）に結ぶなどの支援を行っています。生活相談をお受けしていて、みなさんのネックになってい

るのが“扶養照会”や“世間の目（バッシング）”です。「生活保護は最後の手段としてとっておきたいです」と言っていて、なんらかの理由で住まいや仕事を失くし、貯金があるうちにはネカフェ生活を送るもお金も尽きて路上生活となっても、それでもなんとか仕事をみつければと足掻いておられる方が少なくありません。とくにギリギリを通り越して今もその手段を使う段階であるうとも、制度を活用する決断をするには強い葛藤が生じ、心の整理をする時間が必要なのだとお話しをされていて感じます。

毎週水曜日夜のこの活動では、行政が巡回する日中にはお会いすることができない方々にお会いして、支援を必要としている方々を支援に繋げるという趣旨がありますが、この時間以外にも早朝にも普段お会いすることができない人がいるということで、夜回りならぬ“朝回り”も実施しました。また、終電後の東京駅にも寝袋もなく過ごされて

いる方々がいるということで、終電後、始発までの時間に臨時の“深夜回り”も実施し、寝袋を配布して、池袋の炊き出しに来れるよう電車の回数券をお渡しする（ポランティアさんの粋なアイデア）等の活動も行いました。この日は衰弱して動けなくなっていた



（救急搬送が必要なほどではない）高齢男性をホテルにご案内し、お風呂、着替え、洗濯のお手伝いまでご支援させていただきますました。

街中や駅ナカには、アパートがありながらも路上で過ごされている方々も特定数います。1人でいつも同じ場所にいる人、特定の場所が仲間との居場所にもなっていたりもします。20年ほど路上生活をしていた田中さん(仮名)も、大抵同じところにいました。「1人でアパートにいてもどうしたらいいかわからん。1人でここ(雑踏の中)にいるほうが落ち着くのよ」と話されていました。田中さんは長年



空き缶回収を生業としていて、その収入で田中さんにとっての生き甲斐である“お酒”を飲まれていました。しかし、いつもの場所で酒を飲んでグース力寝ている田中さんの姿は、もうありません。

ある日、田中さんから「平田ちゃん、自分でも立ち直れるかな」と、てのはしシェルター利用のご希望があつて、シェルターに入居していただくとした時期がありました。しかし、いざお部屋の契約をしようとして何度約束しても、酔っぱらってその約束の日に来ていただくことができず、結局入居していただくことは叶いませんでした。

しかしその後、都の緊急一時宿泊(ホテル)を利用したのち、生活困窮者支援制度の支援付き住宅(ハウジングファースト型)に繋がりました。田中さんは、終始「自分、大丈夫かね」と、どぎまぎと支れてましたが、清野さんも支援付き住宅の支援員さんも私も「大丈夫、大丈夫」と、田中さんがお部屋に入られたことが嬉しくてたまりませんでした。

しかし、順調に思えたその1ヶ月半後...その日は朝から人身事故で電車が止まり、ダイヤが大幅に乱れてかなり焦ったのを憶えています。昼過ぎになると「今朝の人身事故は田中さんだったそうです」という訃報が入りました。「え?」何が何だかすぐには信じられませんでした。

田中さんには幸い、火葬してお骨を引き取ってくださいました。お兄さんには「あいつは人を疑うことをしらない。優



しすぎたのよ」と仰られ、若い頃田中さんが抱いていた夢の話などもお聞きすることができました。

事故現場には、多くの花とともに田中さんが好きだった「鬼ごろし」が供えてありました。気づけばいつも田中さんのことを誰かが気にしていました。「はい!」と言って空手ポーズをお茶目に決めていた田中さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平田聖子

生活困窮者支援 りぼん @町田

こんにちは。町田市在住の生活相談員、田中のり子です。

昨年の新型コロナウイルス感染症拡大以降、テノハシは急激に増えてこまいの忙しさとなりました。そんな中、清野さんより

「町田から SOS が入っているよ」「保護申請を2度したが断られてしまった」と。

同じ頃、他の団体にも町田の生活保護申請時に水際作戦にあってしまったとの相談が入っているとの情報が入っており、事実関係を問い合わせたところ、きちんと対応しているとの回答を受けていたところでした。

町田の路上からの声がこんなに耳に入ったことは初めてのことです。

路上にいた女性の対応に向かい、窓口での対応に驚いたこと、重い精神疾患を抱える方の対応は、一人では大変であると感じたことがきっかけとなり、町田で支援団体「りぼん」を立ち上げることに。

仲間とともに町田の街を回ってみてすぐに、町田にも長年路上生活をしている方々がいることに気づかされました。意識しなければ見えてこなかったことです。最初のうちは警戒されるだろうと予測しましたが、やはりその通り。しかしこれも地道に続ければこそ、数年続けてみようと。支えてくれたメンバーのおかげで、今ではすっかり常連として親しく、楽しみに顔を出してくださる方が増えました。

さし迫った相談も増えてきました。どこか山奥にでも行って野垂れ死のうと思っていました、管理費の高い無料低額施設から出られるとは思っていませんでした、などの声。路上からだけでなく、家にはいても貧窮してギリギリの状態まで我慢してしまっている女性達からの相談、すでに生活保護受給中だが住まいのことで大変困っている方々からの相談におわれています。

これまでにテノハシで学んできた貴重な経験をフル活用です。必要に応じて、テノハシで受けた相談をりぼんへ、りぼんに入った SOS をテノハシへとマッチングさせることもできるようになっています。大変有効な二足わらし。それにしてもまさかこんなことになるとはまったく思いもよらないことでした…。



町田にもシェルターが必要かもしれません。今は近隣の団体を駆け回り頼み込んでいます。どこも満室の時は途方にくれます。そのうち、なんとかできたなら！

シェルターは支援のおまけがついてくる

「シェルターって何ですか？」という質問を受けることがあります。ハウジングファーストの理念「まず安心できる住まいを提供する」を具体化したものなのですが、どうも施設的なものを想像する方が多いようなので、TENOHASI のシェルターと実際にシェルターを利用された方への支援についてお伝えしたいと思います。

簡単に言うとシェルターは家財道具付きのアパートであり、路上で生活されている方等、住まいがない方が入居と同時に生活できるようになっています。トイレ・お風呂(またはシャワールーム)付きのの部屋に寝具、エアコン、テレビ、冷蔵庫、電子レンジ、洗濯機、調理道具等の他洗剤からタオルまで用意してあります。一般のアパートと違うところはシェルターには期限があるということで、原則4ヶ月のうちにご自分名義のアパートに転宅して頂くということになっています。そして、週に1度ほど訪問して必要なお手伝いをしています。

シェルターに入居されると、まず、大家のつくろい東京ファンドと契約を交わし、生活保護の申請をして頂くこととなります。もちろん申請に当たっては TENOHASI のスタッフが同行します。支給される生活保護費から家賃と共益費を頂きますが、残りはすべて利用者さんの手元に残ります。

以下、実際にシェルターを利用された A さんの場合を例に、どんな支援をしているか、ご紹介したいと思います。

A さんは路上生活が長かったので、まずは住民登録に必要な戸籍を A さんの記憶を手がかりに福祉事務所に探してもらいました。戸籍謄本・附票の請求のお手伝いをし、住民登録することができました。次は身分証明書としてのマイナンバーカードを作ることになりますが、必要書類の記入、写真撮影、申請のお手伝いをし、こちらも無事クリアしました。ゆうちょ銀行の口座も作りました。暗証番号まで私に決めろと言われたのにはビックリですが…。そうそう、今年は新型コロナワクチン接種の予約・同行というのもありました。

ここまでも高齢の A さんには煩わしい手続きの連続で、大変だったと思いますが、さらに携帯電話の購入という難題が待ち構えていました。何を隠そう担当の私が IT 弱者で、どんな電話がいいか、私に設定ができるのか、途方に暮れている状態だったのですが、A さんには強力な助っ人(B さんと呼びます)が存在していました。B さんは3年半ほど前、炊き出しのボランティアをしているときにAさんと知り合い、それから継続的に A さんを支援してこられた方で、スマホ購入に同行、設定、何時間も掛けて使い方の説明をしてくださったうえ、A さん用の説明書まで作ってくださいました。お陰さまで、A さんと電話連絡ができるようになり、とても感謝しています。(* 他のスタッフは頼りになりますし、携帯の貸し出しもできます)

そして念願のアパート転宅の準備に入りました。福祉事務所からは地域定着支援員さんをつけていただき、不動産屋で物件を探したのですが、高齢ということがネックで時間はかかったものの、CW の OK が出、契約に漕ぎつけることができました。並行して、リサイクルショップに同行し、家具・什器類も用意しました。電気・ガス・水道の手続きのお手伝いもし、引っ越し荷物の運搬は事務局長が引き受けてくれました。A さん本当にお疲れさまでした。新居でゆっくりお正月を過ごしてくださいね。

生活相談員 高橋秀子

「現場」から始める。

大学一年生の冬に、私は初めて夜回りに参加しました。あれから一年が経ちましたが、これまでの日々は、骨に染みる体験の連続でした。

初めて夜回りに参加した日。

池袋の駅構内をボランティアで回っていると、中年の男性が二人で地べたに座っているのが目に入りました。私は、一瞬、「二人はホームレスの方だろう」と思い、声かけの準備をしました。しかし、そこにいた内の一人は、なんと代表の清野さんでした。男性と生活相談をしていたのです。地面に座り、共に肩を並べ、同じ目線で話すその姿に、衝撃と、感動を覚えたのは今でも忘れません。

「支援」と聞くと、支援する人が困っている人に何かを与えるという、一方的な様子を思い浮かべます。しかし、実際には、当事者とボランティアの関係は対

等であったり、揺れ動いたりしています。

以前、いつも一緒に夜回りをしていたメンバーが、「私はね、昔、ホームレスだったんだよ」と教えてくれたことがあります。その方は、ホームレス状態から脱出した後、そのまま「支援する側」に回っていました。また、現在、当事者でありながら、ボランティアを行うメンバーもいて、「支援する側」と「される側」の関係が揺れ動いています。

私には、この「関係」について、もう一歩、考えさせられたことがあります。

ある日の夜回り。いつもの巡回ルートが終わりに差し掛かる時、一人の若い男性が駅構内に座り込んでいるのを見かけました。話を伺うと、住まいを失い、数日前から路上生活をしていました。驚いたのは、年齢が私と同じ二十代だったことです。その日の帰り道、私はどこか自分が情けなくなりました。

「あの方は、路上で寝泊まりをし、今夜はもらったおにぎりとパンで夕食をとる。一方で、私とくれば、何もせず、家には温かい食事があり、自分のベッドで眠る。年代が同じで、なぜこうも違うのか。」

小さい頃から、塾に行かせてもらい、大学に当たり前のように通っている私は、自分ではない何かによって、自分たちの境遇が左右されていることに、何かもどかしさを覚ええました。

その晩、いざ自宅で温かい夕食を目の前にすると、まだ情けなさが残り、じつと手を合わせ、祈ることしかできませんでした。そして、この葛藤を明日には忘れていくかもしれないと考え、自分の中の偽善を感じました。

現在でも、支援を求めにやってくる方の中に、同世代を目にします。その都度、「支援」をする立場にいるからといって、無条件に善人ではないこと、さらに、恵まれた環境を自分で手放す勇気もないことを実感します。そして、支えられる立場にある同

世代と、違うところなど何もなく、自分も同じ一人の人間であることに気付かされます。

「現場」から始める。私が、この言葉をテーマにしたのは、自分への上で自分が直接関わることなく、「貧困」や「ホームレス」と一括りにして、支援策を考えがちです。そこでは、支援される人を一方的な対象として捉え、自分もまた同じ一人の人間であるという当たり前の事実を見失いそうになります。さらに、机の上だけで支援を考えることは、どこか「直接、施すのは誰かがやってくれるだろう」という無責任さが隠れているようにも思うのです。

社会問題は現場にしかありません。私はこれからも、一人の当事者として、仲間と共に、「現場」から社会を変えていきます。

ボランティア 三宅大生

渦の中

私が小学2年生の頃、都営団地が当たってそれまでいた母子寮から引っ越しをした。台所と、六畳と四畳半。そこに母1人子4人の5人家族が暮らし始めることになった。私たちだけの空間、一歩で跨ぐことのできる廊下(板張り部分?)に、私は嬉しくて無邪気にはしゃいだ。

お母さんとバスに乗って、よく区役所に行った。お母さんはいつも役所の人と口喧嘩をしていた。あの頃はよくわからなかったけど、あれは福祉事務所のケースワーカーさんだったんだろう。

お母さんは、パートに行ってるか、パチンコ屋にいるか、“おじさん”のところ。週の半分は“おじさん”の家に泊まるお母さん。私たちは、お金を貰ってそれぞれ弁当やカップラーメンを買って食べていた。

その内“おじさん”は家にも来るようになって、寿司やおでんを土産に、小遣いもくれた。だけど、どうしても私たちは“おじさん”を受け入れられなかった。お母さんを守ってあげるのは、幸せにするのは自分でありたかったし、お母さんの“女”としての部分を見たくなかった。お母さんは、“お母さん”であって欲しかったんだ。私が17歳の頃、“おじさん”は体調を崩して失業、家を失い、そのうち図書館や24h営業の牛丼屋のカウンターに突っ伏す姿を見かけるようになった。ガラス越しに目が合うと、気まずくて、後ろめたくて、会釈だけして私は走り去った。

中学生頃までは、私がお母さんを守ってあげたい、早く働いて幸せにしたいと思っていたが、その内「このままこの家にいたらお母さん中心の生活で、時間も金も何もかも一生お母さんに奪われる」という憎しみに変わり、家を出た。



いつも、いつも、若しくてしょうがなかった。でも、どうしてもだか、どうしたらいいかわからない。万能感と絶望が交互にやってきて、時に1日の中でも目まぐるしく変わった。

仕事をしてもすぐに辞め、どのくらいの仕事をしてくたさう。もう、全てを思い出すことはできない。ちょうど仕事をせず一人アパートに籠り、「お金、あとどれくらい持つかな」という不安に駆られていたとき…世を震撼させた“秋葉原無差別殺傷事件”が起きた。ブラウン管の前で、私は子どものように泣きじゃくっていた。

20代後半、今から約十年前位か、その頃に広汎性発達障害や双極性障害等の診断を受けたことにより、仕事が続かないことや人並みのことを出来ない自分を、必要以上に卑下することや責めることはしなくなっていった。

また、たまたまテレビで『貧困問題』の特集を観て、そういうことだったのか、渦の中で私たちは足掻いていたんだと知ることになる。さらに刑務所や路上生活にまで陥る人もいると知り、怒りで震えて、何ともやるせない気持ちになった。

そして私は生活困窮者支援の道に進もうと思い、32歳で通信制大学に入学。精神保健福祉、社会福祉の勉強を始めた。習い事も塾も行ったことがない、大学進学なんて考える余地もない家で育った私が大学に行くということ、高校も馴染めずすぐに中退し通信でかろうじて卒業した自分が大学で学ぶということ、それは、映画『学校』で、田中邦衛さん演じるイノさんが夜間中学で字を習い、好きな先生にラブレターを書くということ、そんなものようであったと思っている。

今は亡き母も、おじさんも、姉兄も、みんながみんな、その時その時を必死に生きていた。

大きな力には私にはないけれど、目の前の人と向き合い、いま、自分にできることをやっていきたい。



TENOHASI の活動

- 炊き出し&医療生活相談&鍼灸 毎月第2/第4土曜日 東池袋中央公園
- おにぎりと夜回り 毎週水曜日 池袋駅前公園～池袋駅とその周辺
- ハウジングファースト東京プロジェクト

活動資金のカンパをおねがいします！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI

銀行振込 ゆうちょ銀行019(せいのけい)支店当座259686トクヒ) テノハシ

クレジットカード決済 ホームページからお願いします。

物資カンパ

衣類・靴・カミソリ・マスク・石けん・食品（缶詰・レトルト食品）など

*現在、調理作業ができないのでお米や野菜は募集を停止しています。

*送り先：下の「発送元」欄参照

お問い合わせ

メール：TENOHASI ホームページの「お問い合わせ」から

電話：080-4733-7920 (事務局 平田)

特定非営利活動法人TENOHASI 会報第42号 2021/12/10発行	発送元
<input type="checkbox"/> HP https://tenohasi.org/	〒177-0045
<input type="checkbox"/> メール tenohasi@yahoo.co.jp	練馬区石神井台6-1-28
<input type="checkbox"/> facebook https://www.facebook.com/tenohasi/	TENOHASI事務局
<input type="checkbox"/> twitter https://twitter.com/tenohasi	TEL 090-1611-1970
印刷 アビーム(社会福祉法人復生あせび会)	

会報誌のweb版をホームページにアップしています。

*個人情報保護のためweb版では「ご寄付御礼」ページは削除しています。

「紙の会報誌は不要」という方は、お手数ですが上の「お問い合わせ」からご連絡ください。